

年頭所感



りんくう、そして
泉州地域の進むべき
「道」と「夢」
病院長 山下 静也

平成27年8月に当センターに病院長として赴任しては
り3年を過ぎました。当センターは新研修医制度のあり
を受け、大阪の最南部という地理的問題もあって、従
来大学から派遣されていた研修医が減るとともに、常勤
医も激減し、それに伴って稼働率も低下するという負の
バイラルに陥っていました。幸いにも、地域医療創生基金の
サポートで、大阪大学や近畿大学に寄附講座を開設して
頂き、常勤医の大学からの派遣も少しずつ増えてしま
りました。研修医教育のための泉州南部卒後臨床シミュレーショ
ンセンターも開設され、最近では研修医の人数も高まり、
競争率も4倍以上の狭き門になってきました。一方、常勤
医ゼロだった消化器内科にも現在常勤医3名、2019年
4月からは4名体制、呼吸器内科にも名が在籍し、や
と内科としての体制が整ってききました。また、内科だけ
ではなく、外科系診療科も人事の刷新を行うとともに、メ
ディカルスタッフ部門、事務部門の補強も行ってきまし
ました。眼科の常勤医を探している状況ですが、泉州の医療
の最後の砦としての形はしっかりと整いつつあると考えていま
す。病院の赤字のために職員給与カットをせざるを得な
いという一時期もあったにもかかわらず、職員全員が頑
張って収益を増やし、稼働率も95%近くまで上げてくれ
ました。大変喜ばしいこと、昨年4月に当センターは
大学病院本院に準ずる医療レベルの実績があるDPC特定
認定されました。マスコミの認知度も上がり、お陰様で最近
では当センターも医師の間でも全国的に名前が知られる
ようになってきました。また、国際学会での発表や英文・
英文論文の発表数、内容も少しずつ充実しつつあります。
関西空港が近いこともあって、当院では国際診療科があ
り、数多くの医療通訳をかかえて日本在住の外国人のみ
ならず、海外からの旅行者も診療しています。りんくうか

ら医療と研究を世界に発信できる体制がやっと整いつつあ
ります。しかし、地元の現状を鑑みると、大阪府は癌や脳心
血管病の死亡率が全国的にも高く、特に泉州地域はその傾
向が顕著で、その原因は低い健診受診率にあります。病気を
発症する前に未病の段階で発見し、疾患の発症を食い止
めるという予防医学は、泉州地域の住民にとって今後極めて
重要で、増大する医療費の削減にも繋がります。そのため
健診部門の更なる充実を図り、それを研究にも活かして
地域住民の健康を守るため、昨年4月からは大阪大学循
環器内科の増田大作先生を、りんくうウエルネスケア研究
センター(RICWA)のセンター長としてお迎えし、泉州地
域の弱点である予防医学を発展させ、未病の時期から対策
を練って、臨床研究にも繋げていく予定です。
一方、2000〜5000人に1人の高頻度な遺伝性疾患である
家族性高コレストロール血症(FH)は放置すると若くは
心筋梗塞を発症する病気で、診断率は低く、十分な
治療が行われていないのが現状です。泉州地域にもFH患
者さんは沢山おられ、見つかった方は当センターで厳重な
脂質低下療法を受けて、脳心血管病の発症を防いでいま
すが、診断されていない方は突然心筋梗塞を起こして、病
院へ運ばれるというような状況です。そのため、近隣の保健
師さんや協力して、健診の段階でFHを見つけて治療しよ
うという試みを始めました。まだ始まったばかりですが、
これによって助かる命が増えることを確信しています。もし、若
いときからコレステロールが高い方がいるとか、家族に若く
か、家族にコレステロールが高い方がいる方が、家族に若く
して心筋梗塞になった方がいるとか、薬を使ってもLDLコ
レステロールが下がりにくいと言われていた方はFHを疑
います。まず、近隣の先生に診てもらいましょう。
このように、泉州地域は大阪府の中でも医療過疎と言わ
れても仕方のない状況でしたが、当センターの診療内容は
極めて充実してきており、りんくうから国内だけでなく、世
界へ羽ばたいて、最新の医療を世界に届けることができ
ような施設になることを私は夢見ています。

特別寄稿 3

医療の 質向上にむけて



副病院長 永井 義幸

2019年 新年あけましておめでとうございませう。
当センターは昨年11月末に日本医療機能評価機構
の訪問審査を受審いたしました。ご協力いただきまし
ました全職員の皆さまプロジェクトチームのメンバー
の皆さま1年間ありがとうございました。患者中心
の医療の推進、良質な医療の実践、理念達成にむけ
た組織運営などの取り組みを審査いただきました。
また受審準備の中で新しい人材を育てることも大
きな目標でした。特に看護の領域では熱意ある人材
が育っている様子が十分実感できた1年でした。医
療の質の継続改善が一时的な取り組みではなく、こ
れからも継続してこそ実りあるものになります。患
者さまが安心して医療を受けられる。選ばれる病
院であるよう、職員一同より一層努めてまいります。

『2019年の 一文字』

改

らさ増い場車、のをえ
成改現改し、源用考
元消費えの方全資運
年元。ひ療きた間全運
今新れ税る。も医働きた
る。も医働きた間全運

特別寄稿 4

りんくうにおける 『心のこもった看護』の ストロングポイント(戦略)



副病院長兼看護局長 藤野 正子

看護局の理念である「そのひとらしさを尊重したケ
アを実践」をもとに、患者の意思決定支援や退院支援
などを充実するために取り組みをはじめ、3年が経
ちました。患者サポートセンターの充実やインフォ
ムドコンセントの同席と意思決定支援、退院支援ワ
キングの活動、退院前後訪問や訪問看護師との同行訪
問をはじめ、件数的には多いとは言えませんが、訪問
を受けた患者さんからは「よかったです」「安心した」など
のお声も頂いています。
しかし、まだまだ部分にしかならずにいます。患者主体
の看護を一人一人が出来ているのかの評価が必要と
考えています。「高齢者の能力を過小評価し」「どうせ分
からない」「これ位は許される」と思っていないだろ
うか。「高齢者を1人の人としてではなく、モノとして
扱って看護をしないだろうか。」(日本看護理論学会の
「日々」の看護を通じ、その人を尊重するためのチェック
リスト)よりなど、患者さんへの対応が、忙しいの中
でも適切に実践できるように、教育を行っていきたく
と考えています。
また、身体抑制に関する基準の見直しを行いました。
急性期病院での身体抑制ゼロが言われる中、命を守る
ための安全性からやむを得ない抑制なのかどうか、こ
の病院でのあり方を今一度見直しと考えています。

『2019年の 一文字』

挑

「張り合う」「競争」を
する。前向きな気持ち
今年挑戦する気持です。
表したものです。

特別寄稿 5

地域と生きている りんくうのこれから



地域医療連携室長 中西 賢

健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。
医療サービス提供のあり方は、かまひつけの先生方
や地域の病院様、介護関係者の皆様の強力なサポートを
いただき、機能分化をしながサービス提供を行って
います。多大なご協力に感謝申し上げます。
泉佐野野南地域は、従前から地域連携が非常に良好な地
域です。今後もこの強みを更に強化していきたいと思
っています。
昨年、2025年問題や地域包括ケアシステムという言葉
を日常的に耳にするようになりました。当院は地域医療支
援病院であり、高度先進医療、救急医療など急性期治療を
提供する医療機関として、地域包括ケアシステム構築の一
翼を担っており、その役割は非常に重要です。地域の中核病
院として、より一層地域医療の充実に貢献してまいります。
地域包括ケアシステムの実践において、アドバンス・ケア・
プランニング(ACP)人生会議への取り組みが注目されてお
ります。これは、「将来の医療及びケアについて、患者さんを
主体に、ご家族や近しい人、医療ケアチームが、繰り返し話
し合いを行い、患者さんの意思決定を支援するプロセスのこ
と」です。ACPを普及させることで、地域住民の皆様が自
らの選択で人生を充実させる。この地域での生活に誇りを感じ
てもらえる地域づくりを目指していきたいと考えます。
その実現に向けて、より一層努力してまいります。

『2019年の 一文字』

継

「つなぐ」という意味、要
なことが「継承」は重
なことが「継承」は重
なことが「継承」は重

特別寄稿 2

泉州地域の救急医療 これまでの10年と これからの発展



大阪府泉州救命救急センター所長 中尾 彰太

私が医師になった平成13年。救急医療と言えば、「来
院された患者さんに全力を尽くす」という当たり前の
ことが展開されていきました。しかし、その後もま
く「当たり前は崩れていきました。救急の需要に供
給が追いつかなくなった。当地域では、平成18
年ごろから、特に脳卒中や消化管出血を疑う患者さ
んの受入れ先が決まらないう事態、いわゆる「たらい回
し」が頻発しました。
この危機的状況に際し、医療に関わる多機関の多大
なるご協力のもと、当時私の上司であった救急医が
中心的な役割を果たし、行き場の無い患者さんをな
くすための新たな救急医療体制を構築しました。ま
た、消防の病院前救護活動や医療機関の受入れにつ
いて、多機関がチャックし改善すべき点を話し合う仕
組みもでき、現在に至っています。
今、救急医療の需要は変化しています。高齢の方が
増加する中、自宅で元気に生活していただくための
医療を提供するうえで、救急医療はそれだけ「入口
」を担う存在になりつつあります。今後は、救
急医療の原点である「命を救うための高度医療」と、
新たなニーズである「地域医療としての救急医療」を
融合し、真に求められる救急医療を幅広く提供でき
る救命救急センターになるよう、努力してまいります。

『2019年の 一文字』

紡

「つなぐ」という意味、要
なことが「継承」は重
なことが「継承」は重